



京都保護観察所長賞

思いやりあふれる国へ

京都市立美豆小学校

六年

橋本 はしもと

愛歩 あいほ

私は、人を思いやることで犯罪は減らせるのではないかと考えました。

犯罪はささいなきっかけや心の変化でおこります。でも、家族や周りの人からの優しさや思いやりの気持ちを受けたり伝えたりすると自然と心が温かくなったり、すっきりした気持ちになったりしませんか。私は、世界が思いやりにあふれる優しい世界になれば犯罪や人を傷つける人も減り、明るい社会になるのではないかと考えました。

インターネットで調べてみると、日本で起こる犯罪の件数は令和四年度では約八十五万件で、令和五年度は約七十万件と年々減ってきているそうです。減ってきているとはいえ、犯罪は怒りや悲しみ、楽をしたいといったきっかけで起きているようで、こころした心の状態が大きくかわっているのだということが分かりました。特に、全体の四割ほどを占める窃盗では、これくらいという軽い気持ちで起こっているという気持ちで起きているということも分かりました。

こころした心の状態を少しでも良くするために必要なことは何だろうと思って調べてみると、「オキシトシン」という神経伝達物質にたどり着きました。オキシトシンは人に優しくしたり、人を助けたりするときに出る物質で、オキシトシンが増加すると気持ちが穏やかになったりストレスが緩和されたりするそうです。こころしたホルモンの影響もあり、思いやりをもつことが大切なのではないかと感じました。

私は、三年生の時に家で一度コップを割ってしまったことがあります。

ます。その時、家族はコップのことよりも、私のことを心配してくれました。他にも私が困っているときに話を聞いてくれたり親切に助けてくれたりする友だちがいます。割ってしまったことや親切にしてくれることをとても申し訳なく思う一方で、心配してくれたことや話を聞いてくれることをとてもうれしく思いました。そして、今度は自分が家族や友だちを助けたいと思う気持ちが強くなりました。

このように、思いやりや人を助ける気持ちは広がっていくものだと思います。私も思いやりの気持ちを受け取るだけでなく、他の人にも伝えるようにすることで、その人の助けになったり、その人がさらに違う人にも思いやりをもって接していきつくれたりすることにつながり犯罪も少ない社会になっていくのではないかと考えました。

それでも、人間だれしも、いつかどこかで間違いを犯してしまうかもしれません。その間違いから目をそらして受け入れないのではなく、反省してそのことと向き合っていく必要があります。自分が間違いを犯さないようにすることは当然ですが、他の人が間違いを犯したときも、罪と向き合い反省することができるよう、これ以上間違いを犯さないように思いやりの気持ちを伝え、人の気持ちや後先のことを考えられるように支えたいと思います。





京都保護観察所長賞

「虐待」で見る社会

京都市立洛北中学校 三年 石井 さら

私が思い描く「明るい社会」とは、多様な世代が互いに支え合いながらよりよいコミュニティの構築に取り組み、次の世代に継承していくような社会です。私はこのような社会を実現することで、現代の大きな社会問題である、親による子どもへの虐待を減らすことができるのではないかと思います。

近年、子どもの虐待死は年間五十件を超え、一週間に一人が命を落としています。また、悲惨な事件を犯した犯罪者が、親からの育児放棄や虐待を受けていたという例も多くあります。その度にSNSでは、「虐待を受けても、過去を乗り越えて立派に働いている人がたくさんいる。虐待を受けた過去は関係がない。」といった意見が見受けられます。犯人が犯した罪を償う必要があるのは当然ですが、私はこのような意見に一概に同意することはできません。実際に虐待は子どもの脳の発達に影響を与えることが示されています。また、私の周りでは、どの親も子どもに寄り添い、とても大切に育てています。そのため、大多数の親に愛され、大切に育てられている子どもたちに囲まれ、親から虐待を受け、「自分は親に愛されていない」と感じながら育つ子どもの孤独は計り知れません。周囲の子どもと自分の境遇を比べて、なぜ自分だけがと絶望し、虐待する親と親をそんな大人にした社会を恨む子どもが出てきてしまうのも当然ではないかと思えます。このことから、私は、虐待を減らすことは子どもへの被害を減らすだけでなく、社会を不安定化する要素である「犯罪」を減らすことにもつながると考えます。それでは、虐待を減らすために、私たちにどのようなことができるのでしょうか。

私は数年前、海水浴場で、五歳くらいの子がシュノーケルを

うまく使えないことに苛立ち、すごい剣幕で子どもの頭を無理やり海につけて練習させている若いお母さんを見たことがあります。その後そのお母さんは、「もっと遊びたい」と泣く男の子を引っ張って海から帰ってしまいました。一部始終を近くで見ていた私たちは暗い気持ちになり、私の母は「難しいね。」と言いました。感情的になっているお母さんに、他人が「かわいそうだからやめましょう」と言っても、かえってそのお母さんの気持ちを逆撫でて、子どもに辛くあたりそつに思えたからでしょう。私たちにできることは、そのお母さんの行動がこれ以上エスカレートしないように近くで祈るのみに見守るだけに思えました。

あのような状況をどうやったら改善できたのかと今でも考えることがあります。一時的に虐待を止めるだけでなく、子どもに辛くあたってしまう親の不安定な精神状態のケアをすることが必要に思えました。あのお母さんも子どもを喜ばせたいと海に連れてきたのだと思います。けれども、中々思い通りにいかない子どもに苛立つ気持ちを抑える心の余裕がなかったのではないのでしょうか。私も将来もし子どもを持ったとき、いつも「ニコニコ」とした母親でいられるだろうかと思えました。あの時、お母さんに注意するのではなく、若いお母さんの気持ちを楽にすることができたならよかったです。と思います。しかし、そのような対応は、その時ただ居合わせただけの他人には難しいことです。したがって親子が暮らしている地域での周囲の人々の普段からはたらきかけがとても大切だと思います。例えば、一人一人が周囲にもう少し目を配り、弱い立場の子どもや孤立している親などに気付いたら、あいさつや声かけなどのコミュニケーションを取るなどして様子を見守ることができるのではないのでしょうか。そして、必要な場合には公的機関の支援につながる手助けをすることが大切だと思います。また、私は保育所や学童保育に通いながら成長してきました。私の母は、子どもを学校に加え、これらの施設に通わせることができたことで、職員の方や周囲の保





護者の方に気軽に子育ての悩みを相談することができたと話していました。また、これらの施設を利用することで、親子が地域とつながる機会も増え、より地域とのつながりを持つことができるようになります。したがって、子育てや生活に負担を感じている親が、これらの施設を気軽に利用できるように、利用条件のハードルを下げるのが大事だと思います。地域の多様な世代の人たちが親子と関わりを持ち、親が孤立せずに、自分たちだけで子どもを育てているのではないと、いつも感じられる社会にすることで虐待を減らすことができるのではないだろうか。

そして、このような周囲の人々とのつながりが必要なのは、子どもを持つ親だけではありません。周囲とコミュニケーションをとることで、「多様な世代が互いに支え合いながら、よりよいコミュニティの構築に取り組み、次世代に継承する」社会につながります。

